



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 追悼文   |
| Author(s)    | 上平, 貢; 伊東, 一信   |
| Citation     | デザイン理論. 1991, 30, p. 2-5  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/53185">https://doi.org/10.18910/53185</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 金田民夫会長のご逝去を悼む

上 平 貢

平成3年4月23日夜半、京都第一赤病院で、金田民夫会長は忽然と他界された。

この悲しい訃報を、私は旅先の松山で、直後に電話で聞いた。朝まで寝つかれなかった。実は前日の22日夕方、私はお見舞いに伺ったばかりで、一週間前にくらべると、むしろ呼吸も楽で熱もあまりないようにお見うけした。奥様としばらくお話をしたが、その間、ちゃんと聞いておられるご様子であった。ようやく失礼しようと、病床の先生の手をとった。するとかるく握りかえされ、そのままいつまでも放そうとはされなかった。私は熱いものを胸に感じた。やっとのこと、後髪を引かれる思いで退室したが、これが今生のお別れになろうとは……。

金田先生を私は長年、金田さんとお呼びしてきた。それは旧制高校と大学の先輩としての誼みと、先生のやさしくおおらかな人柄に対する親しさのためであった。

京大時代、はじめドイツ文芸学を専攻されたが、程なく美学美術史の道へ移られた。とりわけ植田寿蔵、木村素衛、井島勉、源豊宗の四先生の薰陶をうけられ、上野照夫先生とも交誼を結ばれた。

先生の美学的思索は、美的意味における感情を追究することから出発された。ディルタイ、カント、シラー、その他マルクス主義、現象学的あるいは存在論

的立場、さらにヘルダーらの美学へと、次第に美学史的視野を拡大していかれた。そして研究の中心は、ドイツ観念論の美学とその後の発展を、現代まで跡付ける壮大な美学理論の確立であった。その間の成果は『シラーの芸術論』や『美学における自然と現実』などの著書に集約されている。一方、美学はそれぞれの時代における美意識や芸術観の次元にまで遡って省察すべきものと考えられ、西洋の古代から近世にいたる造形芸術を豊かな外遊体験を基に論考された。編著『美術のヨーロッパ』はその結実の一つである。

このほか、金田美学の特質と功績は、美的感情を美的自然との関係で捉えようとしたこと、しかも日本的な美意識の構造との関連で自然美の根基を問い合わせ、進んで日本近代美学の成立過程を実証的に究明し、著書『日本近代美学序説』によってわが国独自の美学の樹立を訴えるなど。いよいよ円熟の境地に向っておられた。

京都市立美術専門学校での短い教鞭の後、同志社大学で40年近く、教育と研究に多大の貢献をされたことは人の知るところである。これと平行して、さまざまな学会活動にも盡力されたが、私たちの意匠学会には創立当初より、井島・河本両元会長のよき協力者として、デザイン研究、ことに理論面の進展に大きな役割を果された。いわば意匠学会史の生き字引きの一人であった。

昨年の春、伊東前会長の後をうけて第4代会長に就任されたばかりで、まだ日も浅い。あの広い視野、深い学識、そして何事にも淡々として卒直に対応し、正論を貫いていかれる先生の姿勢は、今後の本学会の発展にとって誠に貴重であった。

私たちは、いま惜しい指導者を喪った。そして私は、また一人、大切な学問と人生の先達を失った。

ここに謹んで、故金田会長に深甚の感謝と哀悼の意を捧げ、心よりご冥福をお祈りします。天界で永久に、『美学者の旅日記』をおつづけください。

合掌

# 金田民夫氏を悼む

伊 東 一 信

前会長金田民夫氏が平成3年4月23日急逝された。まことに哀惜の極みである。

氏は長年本学会の委員を務められ、学会の運営に絶大な尽力をして来られた。2月の研究例会はいつも同志社大学で開催される習わしになっていたが、氏は毎回心よくお引受けいただき例会の開催のためにご盡力いただいた。その都度開会の辞をのべられたが、そのお言葉が今もなお耳朶に残っているような気がする。

平成2年4月からは会長として学会の発展のために努力して来られた。氏の会長在任中に金沢大会が開催され盛況裡に終幕を迎えることができた。これは氏の大きな功績の内の一つではなかろうか。これからいよいよ学会のために活躍していただかねばならない時に突然のご逝去である。まことに惜しまれてならない。

氏は大正8年広島市にお生まれになり、広島高等学校を経て、昭和18年京都帝国大学文学部哲学科美学美術史専攻を卒業され、昭和30年同志社大学文学部教授に就任された。昭和45年には文学博士の学位を授与され、昭和57年から2ヶ年間、同志社大学文学部長を務められた。その間発表された著書、研究論

文の数は非常に多く、学界に多大の業績を残された。

数年前、意匠学会の例会の会場で、氏は私に「一度私の家のステンドグラスを見に来て下さい。」と云われた。その後、お宅にお伺いする機会もなく打過ぎていたが、突然の計報を受けて、お通夜の晩にお宅に参上した際、突如として、昔お聞きしたステンドグラスのお話を思い出した。そこで注意して玄関の上部を見ると、そこに燐然と輝く美しいステンドグラスを発見した。

氏は死後、輝くステンドグラスのような美しい世界に居られることであろう。ご冥福を切にお祈りするものである。